

私立大学図書館協会 2012 年度海外集合研修報告

曾野 正士*

1 はじめに

2012 年 12 月 3 日から 12 月 9 日の 7 日間、私立大学図書館協会の海外集合研修に参加させていただいた。研修テーマは「東アジアにおける電子化推進図書館を見る」というもので、韓国と台湾の計 7 機関を訪問した。「電子化」は昨今の図書館にとって避けては通れないキーワードであり、他国の図書館がアナログとデジタルをどのように扱っているのか非常に興味があった。

研修の詳細については、私立大学図書館協会国際図書館協力委員会あてに報告書を提出（私図協 HP にて公開）したため、本稿では報告書に記載したこと以外の事項についてもまとめていきたいと思う。

*その・まさし／明治大学 学術・社会連携部 中央図書館事務室

2 研修の選考、準備について

2012年度の海外集合研修は英語能力が必須条件では無く、訪問先も韓国・台湾という身近な国だったことから、例年よりも多くの応募があったそうである。選考は書類と15分ほどの面接で進められ、手応えは全く無かった。結果として5名が選考を通過したが、何故自分が選ばれたのか未だに分からない。

参加者の所属館は、関西（関西学院大学・同志社大学）、関東（聖マリアンナ医科大学・明治大学・立正大学）と東西に分かれ、研修前に一度打ち合わせを行った。選考後から出発までの約1ヵ月間、5名で担当機関の分担を決め、訪問先の情報を調べ、過去の研修の事例を参考にしながら事前質問票を作成、各機関へ送付した。質問の項目としては、電子化導入のきっかけや人材育成、利用者のメリット、今後の方向性などを挙げ、訪問時にも質問票を元に質疑応答を行った。

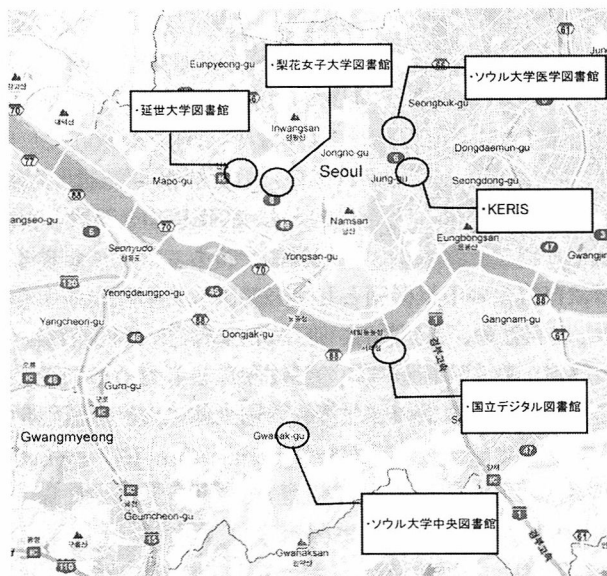
3 研修報告

3.1 研修日程

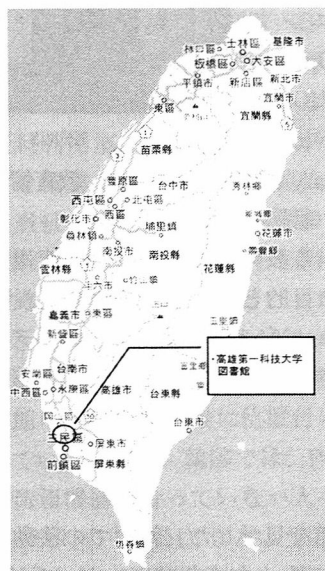
韓国	12/4（火）	午前	韓国教育學術情報院（KERIS）
		午後	国立デジタル図書館
	12/5（水）	午前	国立ソウル大学医学図書館
		午後	国立ソウル大学中央図書館
	12/6（木）	午前	私立延世大学図書館
		午後	私立梨花女子大学図書館
台湾	12/8（土）	午後	國立高雄第一科技大學圖書館

※当初は國立台灣大學圖書館を訪問する予定だったが、天候不良により飛行機の到着時間が大幅に遅れたため、訪問することができなかった。

<韓国>



<台湾>



3.2 韓国教育学術情報院（KERIS）

12月4日、韓国で最初に訪問したのが、韓国教育学術情報院（KERIS）である。

1999年に韓国政府は、分散されていた教育情報と学術研究情報の収集と流通を一元的に統合することを目的としてKERISを新設した。KERISは教育の情報化と関連した政策の執行機能を持ち、大学における学術情報と初・中等の教育情報の中枢機関としての韓国教育情報化の中心的な役割を担う。また、教育行政、生涯教育、進路・職業教育、民間教育等の情報化や、教育格差の解消、教育に情報技術の活用を広めるための国際交流、情報技術の進展に伴う迅速な提供の強化等、韓国全体における情報化の中心的な役割も担っている。

KERISの主な活動としては、教育学術情報化の基盤として、大学図書館総合リスト（Union Catalog）サービス、デジタル学術情報流通体系（dCollection）システム、eラーニングコンテンツ（KOCW：Korea Open Course Ware）、学術研究情報サービス（RISS：Research Information Service System）、相互貸借（ILL：Inter Library Loan）サービス、教育情報総合サービス（EDUNET）システムの提供・運営・管理等がある。

質疑応答の中では、分散されている教育情報・学術研究情報・流通を一元的に統合することを大きな一つの目的としている、という説明をいただいた。日本で運営されている仕組みに近いものもあったが、デジタル化推進の中心組織としてのプライドや試行錯誤を感じさせられる時間となった。



KERIS

3.3 国立デジタル図書館

KERISの次に国立デジタル図書館を見学した。韓国での移動は専用車を手配していただいております、道に迷うこともなく非常にスムーズだった。

国立デジタル図書館は、「知力国家」実現のため、21世紀の図書館像を備えたデジタル情報総合センターの機能を持つ施設として2009年5月に国立中央図書館の敷地内に開館した。

国家知識ポータルをはじめとするインターネット上のサービスだけではなく、多様なデジタル資料を収集・整理・保存し、その情報を用いたサービスを研究・開発・提供するための拠点として、「国家情報リテラシーセンター機能」「国家情報リファレンスセンター機能」「国家情報政策サービスセンターとしての役割」を担う。デジタル図書館は、「Dlibrary」（Digital + Library）と称され、ディブラリーポータルという仮想空間と情報広場という物理的空間を統合し、デジタルとアナログを融合したサービスを目指している。

地下2階の入館ゲートをくぐると、個人利用空間としてデータベースやオンラインコンテンツの検索・閲覧・印刷のできるデジタル閲覧室、図書館所蔵資料のマルチメディアを利用できるメディア資料利用室、映像・イメージコンテンツを編集できるデジタル編集室がある。当日の座席の予約は館内の

予約用PCまたはキオスク端末から、当日以外はホームページから可能ということだった。見学した日は平日だったが閲覧席はほぼ満席であり、国立中央図書館と合わせて利用の多さが伺い知れた。

韓国では国策としてデジタル化は必須の推進事項となっている。国立デジタル図書館はその中心施設に位置付けられ、様々な機器を使って利用者教育も行っている。現在、韓国では、PCやスマートフォン等が普及しているが、電子情報機器を持っていない人々のためにも、無償で機器類を使った利用教育を受けることができるようになっている。

また、国立デジタル図書館では、貴重図書、稀覯本から適宜対象資料を



国立デジタル図書館



デジタル閲覧席

選定し、電子化してディブラリーポータルに登録し、国家知識ポータルにもメタデータを提供している。

このディブラリーポータルでは、国立中央図書館が所蔵している原文のデジタル化資料（約 39 万冊）とオンライン資料（約 79 万冊）を含んだ 1 億件以上の統合検索をすることができる。また、著作権が消滅している資料に関しては、自宅からでもオンラインで閲覧できるようになっている。

司書の方との質疑応答の中では、「電子化を推進する上で、図書館として保存と利用では、どちらに比重を置いているか」という質問に対し、「7 対 3 ぐらいで保存のことを重視して考えてはいるものの、電子資料に関しては永続的な保存ができるのかという点に不安を感じている」と回答を得た。紙に比べ遥かに後発的な媒体である電子資料への期待と不安は日本も韓国も同様であり、デジタル資料専門の図書館がこれからどのような道のりを歩んでいくのかは興味深い。

3.4 国立ソウル大学図書館

12 月 5 日は国立ソウル大学の図書館を見学させていただいた。午前は医学図書館、午後は中央図書館のスケジュールである。

国立ソウル大学は 1946 年に韓国初の国立大学として設置された。学部・大学院を併せて約 28,000 名が学ぶ韓国最高峰の大学である。

冠岳キャンパス・蓮建キャンパスに分けられ、大学本部のある冠岳キャンパスはソウル南部冠岳山の麓に位置しており、医学部のある蓮建キャンパスはソウルの中心部、かつての旧京城帝国大学医学部跡で、大学路と昌慶宮路の間に位置している。

医学図書館は 1946 年に医学部本館 2 階に開設、その後、1971 年に CMB 財団（CMB Foundation of America）からの資金援助により図書館として設立され、1993 年に 2 階建てから現在の 3 階建てに改修された。

蔵書冊数は、2012 年 1 月末現在、図書 212,904 冊（国内 48,202 冊、外国 163,858 冊、電子ブック 844 点）、学術雑誌 5,629 誌（冊子 657 誌、電子ジャーナル 4,972 誌）、データベース 32 点、非図書資料 778 点である。

医学図書館の特筆すべき点は、冊子体と電子版の割合である。2012 年か

ら冊子と電子ジャーナルの両方あるものは、電子ジャーナルに切り替えているため、雑誌コーナーは冊子が少なく、書架は驚くほど余裕が多かった。医学雑誌は電子化が進んでいることもあり、どれだけ早く情報を取得できるかに主眼を置いた結果であるという。学生が大学や学校内のみでなく自宅からでもリモートアクセスし、電子ジャーナルや電子ブックが閲覧できる環境作りに努めており、今後はさらにソフト面での充実を図っていききたいとのことであった。

最新のデジタル機器を多数揃えているわけではないが、コンテンツを充実させていくという電子化の一つの方向性を感じた。



ソウル大学医学図書館



ソウル大学中央図書館

この日は朝から雪がちらつき、昼頃には猛烈な吹雪になった。あつけにとられている間にも雪は降り続け、午後には辺り一面白銀の世界に変わってしまった。医学図書館と中央図書館はキャンパスが分かれているため、大雪の中での移動となった。

ソウル大学中央図書館は、1975年1月に蓮建キャンパスからの移転により建築され、37年経過している。蔵書数は、2011年4月1日現在、図書4,445,092冊、雑誌・新聞95,953誌、電子ジャーナル33,000誌。1日に約1万人の利用がある大規模な図書館である。

学生はデジタル環境に慣れているため、デジタルコンテンツの構築は当然の状況であるという。電子ジャーナルもよく利用されており、ScienceDirect利用率は世界の10位以内に入っている。学生も積極的にデータベースや電子ジャーナル等の電子リソースを利用している。利用者から

の要望として、PC の性能の向上や、Windows だけでなく、Mac 用の講習会の実施等が要望として挙がっているとのことであった。

デジタル化作業も推進している。電子媒体や学術情報サービスへの要求に応えるため、2002 年から電子図書館構築事業を立ち上げ、デジタル化作業を開始し、2012 年 12 月現在、約 49 万件のデジタルコンテンツを構築している。

デジタル化を行うに先立って、制作的側面としては、対象範囲、選定指針、著作権、知的財産権等について、技術的側面として、サービスの質、表現の標準化、メタデータのフォーマット、著作権・知的財産権の保護、様々な技術的措置について検討しておくことが必要との説明があった。

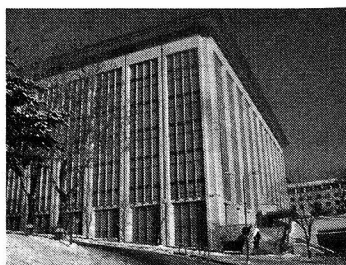
一方、印刷物が持つ歴史的価値も重要であり、全てを電子化するのではなく、様々な情報媒体で保存・提供していくことが、図書館としての役割を果たすことになり、ソウル大学中央図書館としての使命という説明もあった。

なお、現在ソウル大学ではラーニング・コモンズのようなスペースは見られないが、600 億ウォン（約 50 億円）の寄付によって 2014 年に新館を開館予定で、新館には、インフォメーション・コモンズと、現在は館内飲食不可のためカフェを併設予定ということであった。

3.5 私立延世大学図書館

前日の雪が残る中、12 月 6 日は韓国の私立大学 2 校を見学した。

午前中に訪問した延世大学は、韓国で最も古い私立大学であり 1885 年に設立された。現在、学部・大学院を併せて約 39,000 名の学生が学んでいる。図書館の蔵書数は、合計で約 278 万冊であり、雑誌約 16,500 誌、電子ジャーナル約 58,600 誌、学術的なデータベース 314 点を持っている。また、国宝として評価された貴重書を含む古書等も、100,000 点以上収集している。



延世・三星学術情報センター

延世大学図書館では、1990年代の初めに韓国で最初に電子の管理システムを導入した。2007年には、韓国で最初にサブジェクトライブラリアンサービスを導入する等、常に新しい取り組みを行っている。

延世大学の最新施設として最初に名前が挙がるのが、延世・三星学術情報センターである。日本からの見学者も非常に多い。

延世・三星学術情報センターは2008年に最先端IT基盤を備えた施設として、既存の中央図書館に隣接した形で開館している。

座席数は、2つの施設を合わせると、約5,500席、PCは740台を備え、館内面積としては54,262平方メートルと韓国で一番大きい図書館となっている。

延世・三星学術情報センターは、① Ubiquitous Library（最先端IT基盤のユビキタス図書館）、② Cultural Library（豊かなコンテンツを楽しむことができる複合文化空間）、③ Convenient Library（快適で多様な用途別オーダーメイド研究学習空間）の3つの機能（Yonsei University 2012）を有しているのに対し、中央図書館は1階部分で延世・三星学術情報センターと接続しており、人文社会・科学技術・国学の資料を取り揃え、主題別専門司書による学習・研究支援を展開している。また自習室やグループセミナー室等が設置されており、資料を利用した学習に適した空間となっている。

延世大学図書館では、最先端のデジタル機器により構成された延世・三星学術情報センターと、伝統のあるアナログ資料を中心とした中央図書館を並列的に配置し、構造としては、国立デジタル図書館と国立中央図書館の位置付けに近い。

延世大学は、資料に応じてデジタル素材とアナログ素材を区分してサービスしており、最新の図書館インフラとそれに見合った最高水準のサービス体制を戦略的に構築していると感じた。

全体的に学習施設というよりも、最新鋭のIT企業のオフィスのような印象を受けた。学習の質の向上も期待できると思われるが、卒業後、社会人となる学生にとって最新のIT機器を使いこなせるということは、仕事を行う上で非常に大きなメリットと思われる。

3.6 私立梨花女子大学中央図書館

韓国の見学先として最後に訪問したのが、私立梨花女子大学である。

梨花女子大学は、1886 年、ソウル特別市西大門区に、韓国で最初に設立された女子大学である。12 学部と 15 の一般・専門・特殊大学院を設置する総合大学であり、学部・大学院を併せて約 20,000 人の学生が学んでいる。

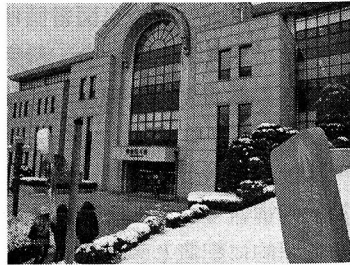
今回訪問した中央図書館は 1923 年に設立、1984 年に移転された。図書 2,000 冊からの開館であったが、現在は雑誌約 9,000 誌、電子ジャーナル約 3,700 誌や電子ブック約 10 万点等、160 万冊の蔵書を所蔵する図書館となった。

梨花女子大学図書館の電子化への取り組みは、1997 年から電子図書館システムとして開始され、本学所蔵資料のデジタル化を開始した。2002 年から、電子図書館システム改編事業により、大学における研究情報の電子化を開始し、2005 年 2 月に学内学術情報の dCollection への登録（リポジトリ化）が行われた。

一方、アナログ資料についての取り組みとしては、FRIC（Foreign Research Information Center：外国学術情報支援センター）として国家的に支援されているサービスに参加しており、主題別に学術情報を収集する 9 大学のの一つとして「Education, Social Science：教育学・社会科学分野」を担当している。この

サービスにより、利用者は無料で該当分野の外国学術文献のコピーを入手できる。図書館フロアでは、2 階に新聞書架や就職・留学の資料が展示されていたり、国立国会図書館専用 PC が設置されており、提供される資料の一部も見られるようになっていた。展示棚には司書が作成した情報検索データベース別の利用案内パンフレットが並び、教員が選定した指定図書（館内閲覧用）が展示されていた。

梨花女子大学の訪問は、当初の日程には入っていなかったが、参加者間で話し合った結果、韓国の大学図書館を訪問できる貴重な機会を有効活用するため、所属大学の協定校であった梨花女子大学にアポイントメントを



梨花女子大学図書館

取り、見学させていただき運びとなった。延世大学ほどにデジタル機器が整備されているわけではないものの、館内にいきわたる細やかな配慮はどこか日本の大学図書館に通ずるものがあった。

3.7 国立高雄第一科技大學図書館

12月8日、研修最後の訪問機関として見学したのが国立高雄第一科技大學図書館である。台北から新幹線で約2時間、台湾南部の都市、高雄は大雪の韓国とは一変し、半袖で過ごせるほどに温暖だった。

高雄第一科技大學は、1995年に創立された台湾の国立大学である。工、管理、外国語、電機情報、財務金融等の5学部を備える。外国語学部には日本語学科も設置され、訪問当日は日本語学科の学生にも同席いただいた。また、高雄は台湾随一の工業都市であり、国立高雄第一科技大學は近隣の企業と密接なコネクションを持っている。2012年現在、学部生・大学院生は7,600人。学生数に対し、キャンパスは非常に広大で、のびのびとした環境であった。



高雄第一科技大學図書館

大学自体が比較的新しい組織であることから、図書館については設立時から電子化への構想があったという。設立時には別の施設だった図書館とコンピュータセンターが2001年に合併し、電子化を見据えた複合施設として現在に至る。

図書館の資料構成としても、2011年現在、図書及び視聴覚資料288,527点に対し、電子資料は302,063点と、冊子体よりも電子媒体の方が多い。2010年に冊子体と電子媒体の冊数が並び、2011年に電子媒体が冊子体の冊数を抜いたということであった。

また、全学的にe-ポートフォリオを導入し、本の活用履歴、利用者講習会への参加履歴、レファレンスでの相談履歴等の情報も登録対象としている。図書館職員は利用者のe-ポートフォリオの閲覧と対応履歴等の情報の

登録を行うことができ、利用者対応にあたって、e-ポートフォリオを参考にして、利用者個人に沿った対応が可能となっている。これは就職活動に活用可能なリストとなり、学生の図書館利用や講習会参加へのモチベーションを高めているという。

4 おわりに

今回の海外研修は、電子化推進状況の視察が主たるテーマであった。一言に電子化といっても、国や各機関によって解釈は違い、そこから導き出された答えもそれぞれ異なるものだった。研修の1週間を通し、電子化（情報化）のシステム構築、コンテンツの作成、電子資料の蓄積、インフラの整備、デジタル機器の配置、利用者（国民・学生）への普及活動という一連の流れを見学し、各機関の方向性を伺うことができた。

電子化事業には予算と人手がかかり、サービス対象が広ければ広いほど規模も大きくなる。有限の資産を効率よく、かつ適正に電子化へと向けるための試行錯誤を各機関で垣間見てきた。これから電子情報は加速度的に発達していくことは間違いなく、図書館と電子化の関わりはまだまだ続くと思う。

今回の研修において、どの訪問先も暖かく受け入れていただき、誠心誠意対応していただいた。国や言葉、習慣など多くの壁はあるものの、図書館という場所が繋げてくれたのだと思う。日常の図書館業務から離れて韓国・台湾を訪問し、その背景や考え方等を、現地職員と意見交換することができたことは、貴重な経験となった。

研修の後には、報告書の作成、夏の研究大会での発表が待っていた。日常業務に加えての作業のため、苦勞もあったが、その全てを含めて有意義な時間を過ごせたと思う。また、研修を通して本当に沢山の方々と知り合うことができた。将来にわたって今回の経験を財産にできるよう今後も努めていきたい。